

こひつじキャンプ in 妙高

ささきみちお
佐々木美知夫
救援対策室長
静岡教会牧師

第19回「こひつじキャンプ in 妙高」報告



9月21～23日の日程で「第19回こひつじキャンプ」がYMCA 妙高高原ロッジで行われました。今回は10ファミリー30人の参加で、子どもたちは3歳から11歳まで18名でした。

郡山駅西口からバスに乗り、5時間近くかかって到着した子どもたちですが、開村式が終わるとすぐに「ドッジボール！」と叫んでロッジの広い庭に出、夕食

までの間、疲れも知らずに妙高の自然の中ではしゃぎ廻って遊び続けました。ドッジボールも終わらず、虫取りも終わらず、東京YMCAの若いスタッフも遊び相手の私も子どもたちに振り回される楽しい時でした。それはまた、日頃、野外で思い切り自由に遊ぶことができない状況が続いていることを子どもたちの様子から感じ取ることにもなりました。

キャンプファイヤーそして2日目の虹鱒釣り、バーベキュー、3日目のそば打ち体験と、子どもたちは用意されたプログラムを充分喜び楽しみましたが、その間にもロッジの庭や黒姫のグラウンドでの自由遊びに夢中になっていました。心から楽しんだキャンプだったでしょう。そして今回参加されたお父さんお母さんたちが口を揃えて言ってくれたことは、私たち大人が本当にリラックスしましたということでした。子どもたちが寝た後に持たれるリラックスタイムでのおしゃべりだけでなく、お母さんたちはそこかしこで女子会を開き、お父さんたちも私たちスタッフとよく話しをされました。3日間まるで一つの家族のように仲良くなれたのも驚きでした。皆さんのお話の中からは、震災からこれまでの困難だけでなく、現在と将来に亘る放射線の子もたちへの影響とその心配や思いも伺えました。4年半経って、なおこのような保養キャンプに参加できることは本当に嬉しくまた感謝だという思いも語られました。YMCAスタッフの皆さんの思いと労に支えられて子どもも大人もすべての時を楽しめたキャンプでした。そして神さまは3日間素晴らしい晴天を与えてくださいました。感謝。



今回初めて、こひつじキャンプに参加させていただく機会を頂き、ありがとうございます。スタッフの方々、皆様すばらしい方ばかりで、とても安心して過ごすことができました。また、妙高高原の大自然と、天気の良い日も重なり、とても楽しい時間を過ごすことができ、心より感謝しております。

震災から時間が経つにつれ、忘れられていく中、このように継続して活動を続けていただいていること、思いを寄せてくださる方がいることに、とてもありがたく思います。放射線の影響がでてくるのに時間がかかる為、私たちは、不安な状況が継続しております。今後共ご支援の継続をお願いできるよう心より思います。

子どもたちにも、多くの方々に支えられこのような貴重な体験をさせていただけたのだと言うことを話しをして感謝すると共に、自分たちが大きくなった時に、生かしていけるように育てていきたいと思っております。

たくさんのお思い出と笑顔をいただき、ありがとうございます。また、お会いできる機会があるとうれしく思います。 喜古美千代

日本基督教団

東日本大震災救援対策本部ニュース

Vol. 18

2015年10月5日発行

169-0072 東京都新宿区大久保 1-7-18-4F T/F 03-3205-6088 救援対策本部長 石橋秀雄



去る9月11日は、東日本大震災より4年6カ月に当たる日であった。あの日の午後2時46分は改めて被災地の方々とそれに心を寄せる者たちにとって忘れられない時として銘記しつつ過ごしたのではなかったか。特にこの日今だあの日のまま自宅にも帰ることの出来ない方々の苦渋が思われたに違いない。その矢先、今度は関東東北豪雨が大きく報道され、更に自然災害列島の感を強くされたことである。それは、ある被災者の「あの日の津波を思わせるものがあつた」とのつぶやきが伝えられたほど、激しい衝撃的なものであつた。

そうした中、日本基督教団東日本大震災救援活動が今日も続いていることは、教会人としての大きな証しである。先日、エマオ仙台及びエマオ石巻を訪ねる機会が与えられた。そこで見て、耳にし、感じたことを記すと、第一に両エマオにおけるボランティアによる働きが今日まで豊かに続行されていることの大きな要因は、先ずその「受け入れ態勢の充実」を見逃すことは出来ない。特に今夏も台湾基督長老教会の方々や遠路、そのための有志が多くいるのでわざわざ選抜試験を受けて、それに合格した人が来日されていることを何うにつけても、それ故にこの方々を受け入れるための責任体制の重大さが推し量られた。もちろん国内各地から結集するボランティアを間違いなく受け入れ、配置し、現場指導をすると共に一日の始めと終わりの充実した集会プログラム等にどれだけのエネルギーが使われているかと思うにつけ、その大変さを先ず思わされた。



次に多くの宗派・団体のボランティアが次第に被災地の現場からその姿を消して行く中であつて日本基督教団の働きが今日まで絶えることなく、日々続けられているのは、参加者への教育と参加意義の継承と共に参加者自身による「口コミ」によるところがある。特に若い人々にとっては其処における被災の甚大さは圧倒的であり、最初はヘドロかき、ガレキ撤去、漁業支援、農地整備を経て、今日は仮設住宅訪問とお茶っこ支援、そして直接被害者の方々に聞くことが主要な任務へとボランティアの中身の変化と被害者周辺に起こりつつある情勢の変化がある。しかし、それらを確認しながらも尚多くの有志が全国から集まって、真面目かつ熱心に与えられた任務をこなしていく姿はたくましさや復興への熱い祈りがあつてのことである。その意味で、主として学生など若い人々の被災地体験は将来の生き方やものの考え方を変えるものがあること確実である。それを一人でも多くの人に伝え、実際現場に立つことを勧めたい。

しかし、実はそれらの人々を陰ながら食事等への支援をもって支えておられるのは、仙台市内諸教会をはじめ他教区までも広がる継続的な奉仕があることを特記すべきである。今回わたしはエマオ仙台における夕べの食事づくりのために何人かが集まって奉仕されているその姿をかいま見ることが出来た。更に、設置された仮設住宅の方々のため月一度とは言え昼食会のための食事を準備され、そこへ持ち寄って最早そこから市営の復興住宅やご自分で建てるのが可能となった自宅へ移る人々も混せて、しばしの別れの時ともなった其処にわたしも座ることが出来た。今や仙台市内の仮設住宅は今年度をもって閉鎖される予定の中、此処における変動も余儀なくされる。

最後に、本年も台湾基督長老教会(PCT)から43名(初動以来延べ232名)の方々がボランティアとして加わって下さつた。当初、PCT総幹事には、「この大災害に対して教団の救援活動が続く限り、我々も援護の手をゆるめない」と言つて頂いた経緯がある。それだけでなく前述のように、このために台湾国内で応募してくる方々をPCTは面接試験まで行い、祈りをもって送つて頂いていたのだ。先日これらの方々と夕食を共にして、お話しをお聞きしたが、この働きを通して多くのことを参加者自身が学び、考え直し、信仰的にも訓練を受けているとの言葉に深い感動を覚えた。

それは、国内のボランティアの方々の声でもあり、わたしたち日本基督教団は、この大震災によって多くのものを学び、神の豊かな恵みを受けることが出来ている。

総幹事
長崎 哲夫

被災地支援 米国日本人特別牧会 (SMJ) 招待キャンプ報告

米国日本人特別牧会 (Special Ministry to the Japanese=SMJ) の招待により、東日本大震災被災地の宮城から8名の中高生、福島から2名の中学生が、7月19～31日までニューヨーク近郊で行われたディスカバリーキャンプに参加する機会を得ました。キャンプに参加した子どもたちの感想をお届けします。

キャンプに参加して

宮城学院高校1年 吉中さくらこ

アメリカに到着し、キャンプへのバスに乗った瞬間、日本語で盛り上がる声、ものすごい早い英語で会話している声が聞こえてきて、「同じ年くらいなのに、どうしてこんなにできるんだろう」という自分が今までやってきたことへの後悔と不安が生まれながらバスに揺られていたことを今でも鮮明に覚えています。

シェルターアイランドでのキャンプ生活の日々はあっという間に過ぎていきました。毎日海で泳いだり、皆とスポーツをしたり、船釣りやブルーベリー農園に行ったり、Tシャツを縛りそれを染めて作るタイダイをしたり、2週間毎日が充実していました。その中でも一番楽しかったことは、キャンプの皆とたくさん話したことです。最初のグループ活動の時、意見がまとまらないというのに、いざ活動にうつると英語での会話が始まり、その中に入っていけず、楽しそうに活動しているほかのグループがうらやましかったです。けれど、2週間一緒に活動していくと、彼らのいろいろな表情が見え印象がガラリと変わりました。例えば、最初グループ名を“ブタゴリラ”にしようとしていた小学生の男子がいました。私は、驚き、仲良くなれるか不安でした。けれど、私が食事の時現地の子しかいないテーブルになり、英語の会話についてい



けず、ぼーっとしていたら、それに気づいてくれて、日本語に訳してくれたり、みんなができるゲームをしようとしてくれたりして、実はとても優しく、頼れるということがわかりました。また、身長が180cmを超え英語をバリバリ話していて、私は心のどこかで距離を置いていた人がいました。けれど、たわいもないことで仲良くなり、実は繊細で努力家ということがわかり、「人を見た目だけでは判断してはいけない」ということをあらためて学びました。ディスカバリーのみんなどは、LINEを通じて、連絡をとっていますが、彼とは、テレビ電話などとして、英語で会話して、英語を教えてもらったり、日本語を教えたりして、今では私の良き英語の先生です。本当にみんなに出会えて良かったです。このディスカバリーキャンプに参加したことにより、生の英語にふれることができ、だいたいのことが聞き取れるようになりました。私の今の目標は、また彼らと会えた時に、英語で会話することです。その目標のために、失敗することを恐れず、アメリカの大きな心で何事にも挑戦していきたいです。

ホームステイ先では、電子辞書はかかせず、話していることがわかって、単語がわからないと、いちいち調べてそれに答えていました。そんな私達にも関わらずホームステイ先のスーザンさんやケンさんは、1回1回待ってくれたり、わかりやすいように説明してくれました。初めてのNYの街はとても大きく、高いビルが見る景色一面に広がっていました。自由の女神や本場のブロードウェイのミュージカルを見たり、G.W.Bを渡ったり、全てが初めての経験でした。

今年の夏は、15年間生きてきた中で一番楽しく、学びに溢れていました。きっと、この先忘れないと思います。アメリカに招待下さり、私達にたくさんものを下さった、日米合同教会、SMJの皆さん、本当にありがとうございました。

東北学院中学校3年 今野彦彦

僕は仙台駅から出発する時とても心配でした。理由は2つあります。1つは、アメリカは広いので迷子にならないか、2つ目は、アメリカの子と仲良くできるかということです。飛行機の中ではそんなことを考えながら、不安を感じていました。

時差を感じながらホテルに1泊した翌日の昼頃、いよいよキャンプ場に向かうバスが到着しました。乗ってみるとそこは完全にアウェーな空間でした。なぜなら、そこで飛び交っていた言葉は、英語と日本語が混ざり、何を言っているのかさっぱり分からず、異様な空間でした。キャンプ場に到着して全員で自己紹介をした時、さっきまで英語で話していたほとんどの人が、私たちに合わせて日本語で話しているの聞き、自国以外の言葉を普通に話している事に大変驚きました。

生活を一緒にしていく中で、英語を話せない僕にとって出来ることは、身振り手振りで体全体を使って表現する事しかありませんでした。しかし、僕は片言の英語でしたが、臆病にならず、いろいろな人に英語で話しかけました。英語が分からない時は、日本語と英語を話せる人に聞き、単語の意味や正しい発音の仕方等を教えてもらいました。そのお陰で他のキャンパーとの距離を縮める事が出来ました。話してみると皆いい人で色々な話をすることが出来ました。その中でも熱心に発音の仕方や単語を教えてくれた人に出会えてとてもうれしかったです。行事などでは、オリエンテーリングや海釣りなども楽しくできました。でも、僕はその行事より皆と過ご



した2週間がかけがえのないキャンプでの思い出です。皆と仲良くなった分、帰りのバスでは別れるのが本当につらかったです。ホームステイでは念願だったヤンキーススタジアムに連れて行ってもらい、とても興奮しました。更に、ブロード・ウェイまで見せていただき感謝の二文字では言い表せないくらいでした。翌日、日米合同キリスト教会に行くとき多数のキャンパーと一緒に夕食を食べるため、僕たちに会いに来てくれました。とてもうれしく感謝で一杯でした。でも、楽しい時間はあっという間に終わりました。最後に皆に会えて本当に良かったです。ニューヨークという場所での有意義な時間を過ごした日々は、僕の人生において忘れられない最高の思い出となる事でしょう。この米国招待プログラムに参加出来て、本当に幸せでした。アメリカで出来た友達、日本から一緒に参加した友達を忘れることなく、人生の宝物にしたいと思います。

福島県公立中学校1年
石塚麻優

今回、福島から参加したのは私と慶弘だけだったので、最初はとても不安でした。でも、アメリカに向かう前から宮城学院のお姉さん達や東北学院のお兄さん達がとても優しく親切にしてくれたので、安心してキャンプに臨むことができました。

約12時間のフライトを終えてアメリカに着くと、車は右側を走っているし、標識ももちろん英語なので、見る物すべてが新鮮でした。

キャンプでは、生まれてはじめてのことがたくさん体験できました。特に楽しかったのは舟釣りです。魚が釣れるかワクワクしながら1時間くらい海を進み、ようやくポイントに着きました。釣り糸を垂らししばらく待っていましたがなかなか釣れず、いっぱい釣れている結愛さんのところへ移動したらようやく待望の1匹目が釣れました！20cmくらいの鯛です。そのときの感動は今でも忘れられません。

英語と日本語の両方が聞こえてくる環境に最初はとまどいましたが、毎日聞いていると慣れてきて、楽しくなってきました。アメリカから参加した人も日本語で話してくれ、たくさん友達をつくることができました。英語も日本語も両方話せるなんてすごい、と尊敬しました。次に会ったときには自分も少しでも英語が話せるようになれるといいと思いました。たくさん友達と夜遅くまでトランプゲームをし、昼も夜も思う存分遊びました。

また、キャンプ中、私は何度も作文の発表をしました。あまり緊張はしませんでした。たくさんひとが真剣に私の話を聞いてくれ、「震災でつらい思いをしたのに一生懸命がんばっていてすごいよ」とほめてくれました。私はアメリカの人に自分の思いが伝わったことがうれしかったし、発表してよかったと心から思いました。

ホームステイでは、キャンプの仲間と別れて4人だけで待ち合わせの場所に向かい、さみしかったし、英語しか話せないホストファミリーとうまくコミュニケーションがとれるか心配でしたが、宮城学院のお姉さんたちが通訳してくれて助かりました。私と2つしか年が違わないのにすごいな、私もそうなりたいたいと思いました。

ホストファミリーの方々には私がいろいろと迷惑をかけたにも関わらず、いつも笑顔で接してくださいました。言葉は分からなかったけど、優しさがどんどん伝わってきて、私も笑顔になりました。私はこのキャンプの経験を通して、たくさんの人に出会い、たくさんの優しさに何度も救われました。私はこの出会いや優しさへの感謝の気持ちを忘れず、将来、自分が優しさを与えられる人になりたいと思いました。

